

祭り囃子の夜

明日は雨だという予報の通りに
夜の風が水分が感じられる
(祭り囃子の音も湿る)

長いながい注連縄を持った男たちの影が神社を出て
路地から路地へと縄を張っていく
縄には紙の人形(ひとがた)がつけられて
湿った風にひらひらと揺れている
(祭り囃子に祈りの声が混じる)

男たちも口の奥で何か祈りをつぶやいているが
言葉として立ち上がっては来ない
何かを否定しているのでも肯定しているのでもない
ただの言葉の原型としての口の動きを隠しながら
一軒の家を縛り終えると
そのまま道に沿って次の家を縛り上げる
(祭り囃子は耳の奥にたまり)

注連縄は町のすべてを繋ぎ
言葉にされることのない隣同士の思いを繋ぎ
祭りのない町とのあいだを仕切っていく
電車は町を出て行くけれど
そのどこかに隠された縄がついていることで
出て行くことは許されているのを知る
(電車は禁止された祭り囃子を載せて行くのだろうか)
風が募ってきて

影の男たちの動きがふらふらと揺らぎ始める
もともとは紙で出来た命を持たない者たちだから
風だけでなく雨でも働くことができなくなる
明日が来る前に
町のすべてを縛ってしまおうと
動きが激しくなる

正露丸の匂いをさせながら、午後四時
の闇を抜けて銭湯に行く老女のさんざめ
きが、町を切なくしている。もうすぐ、
終わってしまう時間の賑わいだ。少し海
が荒れれば、聞こえなくなってしまう、
ひそかな声の群れだ。掛け流し温泉の湯
船から絶えることなく溢れて、流れて、
排水溝に残される脂粉の強い匂いも、死
臭を隠すためのものだろう。エスキスは、
すぐ横の海に浄化されることもなく流さ
れて塩水に混じり、魚たちの身体に混じ
り、切ないものにする。そして、干物に
なった魚たちを食べることで、この町を
訪れる観光客たちも切なくなってしまう
のだ。なにひとつ意識することのないう
ちに、残された時間のさんざめきを撰取
してしまうから。

(祭り囃子が蝙蝠を呼んだようだ)
夜明けの前に町はすっかりと縄で繋がれ
もう誰もこの町を離れることはできないはずなのだが
(祭り囃子に紛れて誰かが出入りする)
朝の光が暗く

雨の音が混じっている
影の男たちは身悶えしながら
神社の奥に身体を労りに帰って行く
(祭り囃子は聞こえるけれど人影はない)
電車が町に入ってくる
この町の禁止を意味のないものにする
電車だが

そのどこかに昨日の夜の電車の気配が残り
誰とも言えない共有された空気はやや安心を与える
雨の中で始まる祭りに
影の輪郭は薄く
役を終えた男たちはどこに紛れたかもう見えない
軒先で濡れそぼれ人とは思えない形に崩れた人形の間の
どこかに紛れているのかもしれない
(祭り囃子が電車の匂いをかぐ)
注連縄は踏切を縛ることができず
やはり裂け目として残されていたのだ
御輿を見物する客たちは
ただ来て
帰って行くだけ
町の者は

電車のつくった裂け目に落ちて
やっと祭りが終わるのだが
(いつまでも寂しい祭り囃子)

情景

二階の窓の外を
黒い影を残して
鳥が落ちていく
雨の冬の夕暮れ
蜜柑を食べ過ぎて
黄色くなった指先が
気落ちした私の
輪郭をなぞっていく

大きな鷺が
屋根の上で振り返って
目の奥を見つめてくる
奥の奥の向こうに
落ちていった鳥が見えて
悲しいとも言えるのだろうか

私信

沖合の船がライトを点滅させ
信号を送っている
私は部屋の窓からそれを見つけて
どんな返事をしようかと考えていた

ボーイスカウトで手旗信号は習ったけれど
この信号が読めるわけではない
それでも私宛のものであることは
疑う余地がない
この窓から見える限り
他に船は居ない
町は私の部屋を除いて
すっかり寝静まっている
つまり
私なのだ

この場限りで開発した信号で
返事を送ることにする
沖合の船のライトの点滅が止み
何事か伝わったらしいことを私は知った

俳句のある詩・5 その木が見えると

帰るのはそこ晩秋の大きな木——坪内稔典

その木が見えると
わたしの足はおのずから走り出すのだ
早くその木の下に立って
あいさつがしたくて
帰ってきたよと。

この町へ引越してきた春の日の午後
アパートメントのベランダで
わたしは発見したのだ

その木が家々の屋根の彼方にそびえているのを。

わたしが生まれるはるか前からその地に立ちつづけている
けやきの木

いつも風に歌い

なにごとかをつぶやいている木

無数の虫と鳥が雨宿りする

大きな傘

その木の下に立ったら

きみも出会うかもしれないよ

裸足の男や

徘徊老人に

影をなくした男や

魂を失った男に

静かな声の持ち主や

耳と足の大きな男に

やがてことごとく葉を落とし

青空に大きな手をいっぱいにひろげるけやきの木

羽田君の右腕のケロイド

遅れて入学してきた羽田君が

同級生たちから一目も二目も置かれていたのは
年上だったからではなかった

いかつい顔と

ごつい体のせいでもなかった

無精髭をはやし

廊下や教室でいつもシャドウボクシングをしていたからでもなかった

校内マラソン大会で

毎年優勝したからでもなかった

だれよりもやさしい男だったからで

足のわるい同級生の鞆をいつも持ってやっていたし

捨て猫を放置できなかったからだ

羽田君とぼくを結びつけたのは

ロッキー・マルシアーノのアメリカと

エルヴィス・プレスリーのアメリカで

羽田君は鼻の割れたマルシアーノの顔の写真を見せてくれ

ぼくはエルヴィスの歌をうたってやった

英語を教え

数学を教えてもらった

教室やかれの家で。

ぼくらは夜行列車にゆられて一緒に上京したのだけど

いつまでも進路のきまらないぼくをあとに残して

医者をめざした羽田君は

さっさと別の運命の方へ歩いていってしまった

恋人の名前を消したという噂の

ケロイドのある右腕をふって

擬人法

真夜中のドアの向こう側に

立ち枯れの木のように立っていたきみが

いきなりケージを突き出したのだった

台所のテーブルの上の

砂の詰まったケージをながめているうちに

わたしは忽然と悟った

きみが遠くに旅立ったことを。

砂の上のちいさな足跡と

食べ散らかした向日葵の種たち

昼間砂のなかにもぐって

夜間歩きまわる砂色の生きものよ

時代遅れの技法だなんていうひともあるけれど

わたしが好きなロバート・ブライが好きな

擬人法が好きさ

深夜台所から寝室までフローリングの床を這ってやってくる声たち

——死にたかったわけではない

——ただ死なないわけにはいかなかったのだ

